



神奈川大学図書館 2F窓外観

CONTENTS

- さようなら、横浜図書館 40年の感謝を込めて！
- 3階 新書・文庫コーナー - 2頁
- 横浜図書館 1 - 2月展示報告
- 彩色の日本 - 6頁
- 所蔵資料紹介
- 日下部金兵衛アルバム - 7頁
- 図書館からのお知らせ 今号の表紙／編集後記 8頁

さようなら、横浜図書館 40年の感謝を込めて！

— 3階 新書・文庫コーナー —

横浜図書館は、2021年2月から2022年3月まで現在のB1階から3階を改修のため閉館、2022年4月に新しくオープンします。このため改修によって無くなってしまいう設備や内装、閲覧室を記憶に残すため、図書館だよりでは「さようなら、横浜図書館 40年の感謝を込めて！」をこれまで3回にわたって特集してきました。4回目の今回は横浜図書館3階の新書・文庫コーナーを紹介します。



現在3階にある新書・文庫コーナーは、開館当時は休憩室として使われていた場所でした。1995年4月号の図書館だより「図書館の各種機能の改善について」には、利用環境の整備として様々な改善が行われ、その一つとして「新書・文庫本コーナー」が1階開架閲覧室に作られたことが書かれています。翌年1996年には新書・文庫コーナーとして3階に移動しました。



開館当時の3階 休憩コーナー



現在の3階 新書・文庫コーナー

岩波、ちくま学芸、講談社、ハヤカワなどの文庫や新書版は持ち運びしやすく、手軽に読めることから貸出数も多い人気の本です。このような本は“08*”という分類番号が付けられ、同じ新書・文庫名の本が一か所に集まるように配架されました。



岩波文庫

文庫本の始まりは？



主に古典や定評のある著作を収めた小型、廉価版の双書である文庫本は、1903年富山房の『袖珍名著文庫』が日本で最初であると言われています。袖珍文庫は日本の古典を中心に50冊が発行されました。そして文庫本の評価を定着させたのは1927年創刊の『岩波文庫』でした。

袖珍名著文庫、岩波文庫とともにヨーロッパの文庫本を手本に作られ、その手本の一つとなった1867年創刊のドイツの『レクラム百科文庫』は、今でも発行されています。

レクラム百科文庫

Reclam-Verlag (レクラム出版社)は、1828年アントン・フィリップ・レクラムがライプチヒで創業。1867年にドイツ古典主義文学の代表的な作家達の著作権保護が切れると同時に小型で廉価版の〈レクラム百科文庫 Reclams Universal bibiothek〉の発行を開始しました。各国のあらゆる分野にわたる著作を収録し、150年以上の歴史を持つ文庫です。図書館では地下書庫にレクラム百科文庫を所蔵しています。



ハヤカワ文庫

SF 小説、ミステリー小説と言えば、ハヤカワと連想する人も多いでしょう。海外の作品を得意とし、ミステリーの女王アガサ・クリスティーの本を出版しています。また、ミステリー以外の小説やノンフィクションも充実したラインナップで並んでいます。



岩波新書 中公新書

いずれも日本を代表する歴史ある新書です。新書版とは基準寸法は大体 105 ミリメートル×173 ミリメートルの大きさで、イギリスのペンギンブックスを手本に 1938 年岩波書店が最初に新書版の刊行を始めました。ページ数も大きさも手ごろな教養書として読まれています。



新書・文庫コーナーの3階の廊下には、日本の文庫本に相当する海外のペーパーバック版が並んでいます。海外のペーパーバック版も文庫本と同じように軽く、廉価版で持ち運びしやすいのが特徴です。



Penguin Books

ペンギン社には様々なシリーズがあり簡単に読める英語多読書も多く出版、本図書館リフレッシュ・ルームにも並んでいます。写真は3階廊下に並ぶ古典文学作品のシリーズ“ペンギン・クラシックス”。



Colección Áncora y delfín



スペイン語ペーパーバック版文学叢書。ペンギンよりも少し大判で、読み応えのある文学作品のシリーズ。

装丁やサイズが揃っていないところも特徴。

3階の新書・文庫コーナーは、いつも静けさが漂っていて、手軽に読める本が落ち着いた空間で好きなだけ選べる、図書館らしい場所でした。新しい図書館でもこのような空間を提供したいと思います。

彩色の日本



写真術は今から約180年前に誕生しました。当時はもちろんモノクロ写真のみで、カラー写真が市場に出始めたのは20世紀に入ってからでした。しかしそれ以前に、明治期の日本ではカラー写真が作られていました。その写真は職人の手によって美しく彩色されたもので、外国人旅行者の土産物や輸出品として人気がありました。

展示では、本図書館所蔵の明治期の彩色写真やアルバムなどを紹介しました。

展示風景

主に横浜で作られていたため、後に「横浜写真」と呼ばれるようになった彩色写真やその第一人者といわれ日下部金兵衛のアルバム、蒔絵で表紙が作られた珍しい蒔絵アルバムや絵葉書など、その他様々な所蔵資料を展示しました。その彩色の美しさと当時の職人の技術には驚くべきものがあります。



横浜写真



日下部金兵衛 アルバム



蒔絵アルバム



横浜絵葉書

会期：2020年1月10日-2月

場所：横浜図書館1F展示コーナー

(資料サービス課 荏原 直子)

日下部金兵衛アルバム

Collection of photos of Japan in the early period of meiji / Kinbei Kusakabe.

Yokohama : K. Kimbei, Photographer, 18--?

請求記号 : A092-4 (横浜 貴重資料)

人は古くから自らの生きた世界やその存在を何らかの方法で残そうとしてきた。石を削って彫刻に、巨大な建造物の壁に、また絵画という平面の中に。人は自らが生きた世界を、それが消え去ってしまう前に時を超えて存在し続けるはずの何かの中に残そうとしてきたのだ。写真というものが発明されるとこの新しい技術は世界中で歓迎された。自分が見ている風景や人間がそのままそっくり小さな印画紙に残されるのだ。ただ、一つだけ残念なのは現実の世界は様々な色彩に満ちているのに、写真には色がなかったことだ。そのころの写真はモノクロだったのだ。今、自分がいるこの世界を色も形も



そのままに残せないものだろうか。カラー写真の技術は、色彩に満ちたこの世界を再現するために研究された。

カラー写真の技術が一般に使われ始めたのは、フランスのリュミエール兄弟が1904年に発明した「オートクローム」が最初と言われる。1930年代には「コダクローム」が発売され、次第にカラー写真は普及していった。しかし、それ以前の明治期の日本では既に美しいカラー写真が作られていた。一体どういう技術を使ったのか。絵師の手で写真に色をつけたのである。

開港の地、明治期の横浜は外国人旅行者が多く、日本情緒のある土産物などが盛んに作られた。この頃人気が高かった土産物の一つに後に「横浜写真」と呼ばれるようになった手彩色写真がある。主に横浜の写真師によって作られたモノクロ写真に、絵師の手で繊細な色付けを施した美しい写真である。アルバムなどに仕立てられて外国人向けの土産として人気があった。その手彩色写真の第一人者とされるのが明治14年に横浜弁天通りに「金幣写真館」を開業した日下部金兵衛(1841-1934)である。

日下部金兵衛は山梨県甲府市の商家に生まれ、安政6年頃開港期の横浜にやってきたと言われる。金兵衛はこの地で新しく西洋からもたらされた写真術に出会い、写真家フェリクス・ベアトの助手として撮影旅行に同行し、また、絵の心得もあったので写真の彩色もしていた。金兵衛のアルバムには鶏卵紙という印画紙に手彩色を施した写真が一枚一枚貼り付けられている。その写真の特徴は、何とんでもその繊細な色彩の美しさである。しかし手彩色写真の第一人者と言われながら、その名は暫くの間、日本で存在が忘れ去られていた。外国人向けの商業写真家という面が、正当な評価がなされなかった理由の一つにあっただろう。しかし海外で1979年に刊行されたC.ワースウィック編著『JAPAN』には、日本の写真史に名を残す写真家としてその名前と写真が掲載されている。



金兵衛のアルバムは当時の日本の風景、色彩の美しさを伝えてくれる。明治期に生きた金兵衛が印画紙の中に残した世界は100年以上経った今も、消え去ってしまうことなく存在し続けているのである。

(資料サービス課 荏原 直子)

図書館からのお知らせ

横浜・平塚共通

■春季長期貸出期限日

2020年4月8日(水)

返却期限日までに必ず図書館に返却してください。

延滞すると延滞日数分(最長2週間)貸出停止になります。

資料を汚損、破損、紛失した場合は、規則により弁償していただきます。

■図書館を利用する際は学生証が必要です

入館ゲートを通るとき、退館するとき、図書を借りるときに学生証が必要です。

■ガイダンス

横浜図書館では4月、5月に利用ガイダンスを行います。ガイダンスの内容については図書館ホームページをご覧ください。

■盗難への注意

貴重品(財布、携帯等)は席を離れる時、必ず身につけてください。

■館内マナーを守りましょう

- ・飲食は禁止です。ただし蓋付の飲み物に限り水分補給ができます。
- ・飲み物は机の上に置かず、鞆にしまってください。
- ・喫煙禁止
- ・スマートフォン、携帯電話はマナーモードにして、通話をご遠慮ください。
- ・他の利用者の迷惑になる行為は慎んで、静かに利用してください。

■図書館では館内で利用できるノートパソコンの貸出も行っています。

是非ご利用ください。

編集後記

1979年、後にSF界の古典的傑作と言われる小説が出版された。タイトルは『銀河ヒッチハイク・ガイド』、著者はダグラス・アダムス(Douglas Adams, 1952-2001)。

舞台はイギリス、主人公アーサーの家がパイパス建設のために取り壊されるところから始まる。しかしその直後アーサーの家どころか、銀河パイパス建設のために地球そのものが取り壊され、アーサーとその友人フォード(実は地球人ではない)はヒッチハイクでヴォゴン人(宇宙人)の土木建設船に拾われる。その後再び宇宙空間に放りだされた2人は偶然、頭を2つ持つ銀河帝国大統領ゼイフォード・ビーブルブロックスがかっぱらった宇宙船「黄金の心」号に拾われ、アーサーがひそかに恋する女性トリリアンとの4人で宇宙の旅に出る、といったストーリーだ。

このコメディ作品には4人の中心人物にもう1人、マーヴィンというAI搭載型ロボットらしきものが登場する。マーヴィンは年中「いま、私のことをうっとうしい奴だと思ったでしょ?」とか言いながら、痛くもない足を引きずって歩く“電子ふてくされ機”と陰口をたたかれる憂鬱症のロボットだ。他にも開閉するだけで仕事に対する自己満足の気配を漂わせるうっとうしい「明朗快活な性格を持った自動ドア」も登場する。こんなことになったのも〈シリウス・サイバネティクス社〉が人間そっくりの人格をもったロボットを作ろう、と言い出したせいだという。

AIが人格を持つことに対して様々な議論があるようだが人間そっくりにすればするほどしょうもない性格のAIロボットができた、というのはありそうだ。こんな話を書いてある1979年の不朽の名作、大笑いしながら読んでほしい。

(N.E.)

今号の表紙

神奈川大学図書館 図書館外観(2階窓)

図書館を23号館通路側から見上げた2階窓の外観。レンガ造りの外壁と調和した色の格子。クラシックな趣があり、歴史の積み重ねに耐えるデザインである。

